

初の世界仏教徒サミットに参加して

ツルティム・ケサン

世界で唯一のヒンドゥー王国ネパールで一九九八年十二月一、二の両日、同国政府主催で初の世界仏教徒サミットが開かれた。同国政府から招待されて出席してきたので、サミットの模様を報告したい。

「アーナンダよ。信仰心のあるまじめな人が実際に訪ねて見て感激する場所は、この四つである。その四つとはどれどれであるか？」

〈修行完成者はここでお生れになった〉といって、信仰心ある良家の子が実際に訪ねて見て感激する場所がある。〈修行完成者はここで無上の完全なさとりを開かれた〉といって、信仰心ある良家の子が実際に訪ねて見て感激する場所がある。

〈修行完成者はここで教えを説き始められた〉といって、信仰心ある良家の子が実際に訪ねて見て感激する場所がある。

〈修行完成者はここで煩惱の残りの無いニルヴァーナの境地に入られた〉といって、信仰心あるまじめな人が実際に

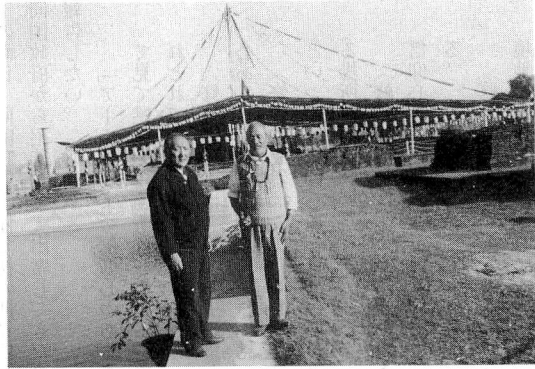
に訪ねて見て感激する場所がある。」

(中村元『ブッダ最後の旅』岩波文庫)と『涅槃経』に説かれている四大聖地の一つ、釈尊が王子として生を受けたルンビニは、ネパールの首都カトマンズから西へ三百<sup>キ</sup>。この聖地に世界的な注目を集めるために、今回のサミットは開催された。

サミットはまず十一月三十日のブレ・サミット・ミーティング(作業部会)からスタートした。作業部会を招集したカドカ文相は政府がルンビニ開発に全力を尽くす固い決意を表明し、イスラム教徒にとつてのメッカやメジナ、キリスト教徒にとつてのエルサレムのように、ルンビニが仏教徒並びに平和を愛する人々にとつて巡礼の中心となるべきだと強く主張した。

基調演説でアーナンダ・グルゲ博士は、個人および社会の平和と調和の源流である点で仏陀の教えは人類に対する最大の貢献であり、仏陀はカーストや性別に係わらず誰でも、悟り(精神的な至高)へ到達できると説いた人類史上最初の伝道者であると指摘した。博士はまた、社会問題に対する仏陀の関心に焦点をあて、仏陀の教えは人生を哲学的に説明するだけのものではなく、山賊行為に対して仏陀が示した解決策は山賊の処罰ではなく、施しと食物や種および正しい賃金といった補助を通じての貧困の根絶であったと指摘した。

博士はネパール政府がルンビニを世界平和の源流とし、仏教徒のみならず世界の平和を愛する人々の巡礼の中心と宣言することに指導的役割を果たしたことを評価した。さらにルンビニ



はあらゆる仏教徒が伝統、学派の区別なく、世界平和を推進する共同作業をするのに焦点となる地であると強調した。

基調講演の二人目は著名な学者で敬謙な仏教徒であるハルカ・グルン博士。グルン博士はアシヨカ王の訪問から現在までのルンビニの歴史を簡潔に発表。ルンビニで行なわれてきた基本計画のレイア

ウト、開発・建設作業に付いて説明した。またルンビニ開発信託基金への寄付の振り分けの詳細について報告した。

博士はルンビニの幾つかの記念物、考古学上の遺跡が過去の政治的不安定さと自然による破壊の犠牲になったことを指摘。また、ルンビニ開発信託の構成の頻繁な変更と政治的な介入によって信託の仕事は非効率、無効果になったと指摘した。

博士はルンビニ開発の基本計画を再検討する重要性に焦点を当て、短期・中期・長期の計画として区分けを行なうよう提言

した。

博士はまたルンビニ開発に対する政府のつよい関与と、ルンビニ開発信託を政治より上部に位置する真の自治的機構として規定するように求めた。

基調講演に続く一般討議ではルンビニの開発のための国際委員会を緊急に復活させる必要性が強調された。国連開発計画(UNDP)の代表は、国連はこれからも援助を喜んで継続することを保証した。

ルンビニ開発基本計画の見直しと、ルンビニのさらなる開発のために組織され、システム化された「透明」な計画の必要性が指摘され、ルンビニの開発は同地域の開発と手を携えていかなければならないことが確認された。

外来の参加者はルンビニの開発は一義的にはネパールの責任であると指摘。しっかりした国内的リーダーシップが確立されれば、外部からの金銭的、物質的、人的資源の流れも容易になると指摘した。

インドからの高名な参加者サマニ・マンガラ師は、平和を意味するルンビニは、自分が発明した科学によって、自ら絶滅へ向かっている人類すべての希望であると述べ、サミット参加者はルンビニの重要性が仏陀の生誕の地であることにあり、ルンビニは普遍的な平和の殿堂であると強く感じていると述べた。

スリランカからの参加者ニマール・サマラスンデラ氏はルンビニでの仏教大学の創設を提言し、拍手で迎えられた。

十二月一日。世界三十カ国からの約四百人の代表团および参加者を集め、仏陀の生誕の地ルンビニで世界仏教徒サミットが始まった。開会式では王室評議會を代表してディベンドラ・ビール・ピクラム・シャー皇太子殿下が法燈に点灯することで開催を宣言。皇太子殿下は仏陀の教え、特に世界平和、友好および共存などは過去においてそうであったように、現在にも十分通用するものであると述べられた。



「太古から人類は平和を追い求めてきた。平和が現存しないことよって個人や社会がこうむった多くの悲しみや凄惨さを見てきた。仏教の平和の教えは多くの国に指針として受け入れられ、その結果として、ルンビニは世界平和と善意の力強いシンボルとなった。

ルンビニの価値と威厳を認識し、神聖な平和の殿堂とする開発計画への国内的なまた国際的な努力

は途上にある。

今このとき、私達は三十年以上前に、亡き祖父マヘンドラ王と先の国連事務総長故ウ・タント氏の二人がルンビニの開発のための国際協力にイニシアチヴをとったことを思い出したいと思う。日本の建築家丹下健三氏のルンビニ開発の基本計画もまた偉大な貢献であった。

ルンビニを世界平和の礎にするというこのサミットを、ルンビニの地で開催することは、サミットの意義と重要性をさらに強化するものである。

このサミットでルンビニの全面的な開発への適切な計画と決意の宣言を採択できるように希望する」

と、述べられた皇太子殿下は、世界のすべての平和を求める人々が、世界遺産でもあるこのルンビニの開発作業に協力し参加することを希望する由を表明された。

ネパール政府を代表してギリヤ・ブラサド・コイララ首相は、「昔から、仏教とヒンドゥー教はともにネパールで栄えてきた。両方の宗教の後継者は、一緒に巡礼し、互いの祭礼に参加し、神々を共有してきた。ネパールの社会は両宗教の統合体を象徴していると言えよう。

ネパール政府と国民はルンビニの発展に専心している。政府は道路を建設し、空港設備を拡張し、種類も豊富な六十万本以上の木も植えた。ゲストハウスを建て、電気や水を供給し、ルンビニを仏教徒と全世界の平和愛好者の最も神聖な殿堂にするための基盤整備のために、あらゆる方策を講じてきた。

国際空港を作るための予備工事も始まっている。

しかし、しなければならぬことがまだまだ沢山あることは、自覚している。政府はこの数年間、我々のルンビニ発展のための努力が十分には援助されていないと感じている。ネパール政府はルンビニを世界全人類の協力による国際的複合体とするため、あらゆる個人、組織、そして友好的な国家と協力すべく、全力を尽くすつもりである。

私はまた、ルンビニ開発計画は地域住民の福利と密接して完成されるべきだと考えている。

ルンビニは地理的にはネパールの一部ではあるが、それはまた人類の世界遺産でもあり、その開発には全世界が関心を寄せている。それ故、この機会を借りて世界の平和愛好者と仏教者たちとに、ルンビニの早急な開発に共に努力しようと呼びかけたい。

釈尊はアヒンサ（非暴力と平和）を説かれた。それ故、関係諸機関には、あらゆる平和に関する宣言・決定は世界平和の源泉であるこのルンビニの聖地からなされるよう要請する」と、発言した。

ネパール駐在のタイ国大使はタイ国王からのサミットへ向けてのメッセージを読み上げ、スリランカの仏教対策相およびミャンマーの宗教相もそれぞれ発言した。アナン国連事務総長の長文のメッセージはUNDP代表によって読み上げられた。ブータンのサンカナヤック・アニルデウラ・マハスタヴィール・アバタリ・ラマ師をはじめ参加諸国の高位の僧侶も発言し

た。

この後、アチャルヤ副首相を議長にサミット会議が行なわれた。

翌二日、サミット参加者はビレンドラ国王、デイペンドラ皇太子、コイラ首相、アチャルヤ副首相、カドカ文相、その他の内閣閣僚、学者、ルンビニ開発信託の役人とともに次のようなルンビニ宣言を決議した。

#### ルンビニ宣言（要旨）

1、ネパール政府が、ルンビニを世界平和の源泉として、また仏教者と世界の平和を愛する人々の神聖な巡礼の中心地であると宣言し開発の第一歩を踏み出したことを歓迎し、支持し、評価するとともに、この国家としての関与が将来にわたるものと確信する。

2、世界平和の推進において、ルンビニに神聖な寺院を具体化することが適切で時宜を得ていることを強調する。

3、国際仏教大学をルンビニに設立するという提案の可能性調査を行なうことを提案する。

4、ネパール政府にはバイシヤカ・ブルニマ（五月の満月の日）をルンビニの日と定め、聖なる地の重要性をよりアピールするように、精神的、文化的な活動を組織してもらいたい。

5、ルンビニの情報に広範な国際社会の注意を喚起せねばならない。

6、ルンビニ開発信託の活動を支える財政的要求の増大にか

んがみ、各国政府および寄付者への呼びかけを進める。

7、開発信託側には寄付者・支持者との活発な意見交換を維持するように勧告する。

8、国際社会などとも相談の上、現在の開発基本計画を見直すことを要求する。

9、ネパール政府、特にルンビニ開発信託に対し、現在のシステム・手続きを見直し、早期に改良された基本計画を完了できるように、組織的できちんとした進展を保証する意味から、国際的な助言機関を創設することを考慮するよう進言する。

10、ネパール政府にたいしルンビニ開発信託を恒久的かつ自治的主体として扱い、国連にたいしては、国連ルンビニ開発委員会に挺子入れするように要求する。

11、世界の平和を愛する人々とネパール政府との協力が続くことを希望し、二年に一度ルンビニの聖地で継続的にサミット会議が開かれるように希望する。

ネパール政府が、世界三十カ国から仏教者を招いて、ルンビニを世界平和の源泉として、また仏教者と世界の平和を愛する人々の神聖な巡礼の中心地であると宣言し開発新規巻きなおしの第一歩を踏み出した、この度のルンビニ仏教徒サミットの意義は大きかったと言えよう。